

---

# If in pop'n music

D - Dream

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

If in pop-n music

### 【ZINE】

Z3306Z

### 【作者名】

D-Dream

### 【あらすじ】

ポップンの俺的二次創作短編集的なものです。各話は（ほぼ）繋がっておりません。もしも要素や俺設定要素が特に強いと思われる作品にはタイトル名に\*をつけてあります。また、作者の気まぐれで大量に更新したり、長期間放置したりすると思いますが、ごゆるりとお付き合い下さいませ。（タイトルへの（文法的）ツッコミは胸の奥へしまつてください）

\* 戦う・魔法・道具・逃げる

\* もしもポップンがロールプレイングゲームだつたら

名前：六<sup>ろく</sup>

職業：書道家、侍

装備：大見解（筆）、一撃必翔（刀）

技能：男々道（物理）、雪上断火（刀）、路男（特殊）

所属：Des - ROW・組

能力：攻89 守65 速55

名前：鬼<sup>おに</sup>-Be

職業：妖靈

装備：なし

技能：深超深TIOON（特殊）

所属：あさき家

能力：攻56 守19 速28

名前：？（はてな）

職業：神の付き人

装備：トライデント

技能：ニヒンテ（必殺）

所属：MNDを働かせる会

能力：攻 守 速

「神つてば、？をひいきしそぎー！」

「だつて、？はかわいいもんな」

「ハテナは？」

「ハテナは仕事仕事つるさいし、怖い」

「……ご主人ん？ 仕事が溜まつてますよ？」

「ハ……ハテナ……」

「おしゃべりしてる暇はないんですよ？ 仕事が終わってからにし

第十一回

「ちよ、まつ……イヤアアアー!?」

「…………神、逝つてらつしゃこ」

「……神の悲鳴つて、なんか女の子みたい……」

## 裏として鳥へ猫の如く

「ノワール、比利行ったの一？ 出ておいでー」

金髪の少女が一人、飼い猫の名前を呼びつつ歩いていた。

「どうしたの、お嬢さん？」

長めの髪。無精髭。

少女に声をかけたのは、あまりにも胡散臭い匂いがする男だった。

「飼い猫が迷子になってしまった。もうすぐお稽古の時間なのに」

少女は見知らぬ男に話しかけられたにもかかわらず、躊躇なく口を開いた。

「それなら、かわりに探ししますよ」

「いいんですか？」

「俺、なんでも屋してるんです。Mr・KKのなんでも屋っていうね」

男は商売用の愛想笑いなのか、にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、お願こしようかしら」

「クライアントであるお嬢さんの名前を伺つてもいいですか？」

「ベルです。えつと…… KKさん？」

「おまかせください。ベルさん」

KKはもう一度微笑んだ。……エリカと雪絵、ニヤニヤつて二つ  
た感じの微笑みだったが。

「ノワールー。ビーだー」

——

「そこか！ 待て、猫！」

——

どうやら、猫の方が一枚上手なようだ。駆け出したKKの腕の間  
を黒猫がすり抜ける。

いや、動物の本能がKKの本分をかぎとった、とでも叫ぶべきな  
のだろうか。

「……ベルさんとの待ち合せまで、あと一〇分か」

KKの雰囲気がフツと変わった。

「！」のお店で待ち合せだったわよね

稽古事の終わった私は、そのまま待ち合わせ場所の店へと向かつていた。

『Days』を掲げられた看板を見て、軽く深呼吸をするヒーラーを開けた。

「おや？ 初めての方ですね。……ベルさんですか？」

入るなり話しかけてきたのはKKではなく、黒髪の青年だった。青い左目に黄色い右目。そのオッドアイに、なぜか懐かしさを感じた。

「はい。KKさん……猫を連れた人が来てませんか？」

「来ていますよ。KKさん、ベルさんが来ましたよ」

奥の方へ青年が声をかける。KKの返事の変わりに、猫の鳴き声が返ってきた。

「あ、ベルさん。ノワールはこの子でありますか？」

姿を現したKKの腕には、黒猫が抱かれている。

「ええ。ありがとうございます」

KKとかわって、猫を抱いた。飼い主の腕はやはり落ち着くのか、ノワールは少し眠そうにあぐびをした。

「あの、お礼に……」

財布を出そうとするが、ＫＫはそれを制止した。

「お礼はかわいいお嬢さんのその笑顔で十分だよ。じゃあ、また」「あ、ありがとうございますー！」

去つてこくそくに、慌てるようにお礼を言いた直した。

心なしか、顔が熱い気がする。

「彼に惚れると大変ですよ、ベルさん」

笑い混じりのそんな声が、後ろの店主から聞こえた気がした。

これが序曲（ルベ・ゼル）へ（前書き）

本文中では名前は出てませんが、ライトの話です。

こいつか宇宙（ルビ：セイヒ）へ

空が好き。

クジラも好き。

好きな空に近づけるから、飛行機はもつと好き。

「いつか僕の作ったクジラみたいに大きな飛行機に乗つて、空を飛ぶんだ」

僕は夢を聞かれると、絶対こいつ答える。

だって、空が好きだから。

近づきたいから、

少しでも近づきたいから、飛行機の設計図を描く。

難しいことはわからない。

きっと、僕の飛行機はまだ飛べない。

でも紙に“夢”を広げるのは楽しい。

今日も僕の夢を製図に描いていく。

「はやく空に行きたいな」

「いや、宇宙だろ」

ニア＝ラムセの訂正が入った。

## 「ヤーと鳴く猫の如く

「……猫？」

「そう。猫」

ケンジの差し出した写真……ではなく、スケッチを俺はまじまじと凝視した。

さすが芸大生。細かい描写の見事なスケッチだ。

……きっと友人に描いてもらつたんだろうが。

「人じゃなくて？」

「そう。人じゃなくて」

ケンジは「クリと首を縦に振る。

「同居人捜しつつ一から、人だと思うだろ」

「猫だよ。同居してるのは事実でしょ？」

「なんでだろ？」

さつきから、ケンジはまばたきをしていないように思つんだが。

あの猫曰は怖い。しかも、まばたきしていないし。

「捗してくれるよね？」

だから、その猫田は怖えんだって！

「俺とケンジの仲だしな。……分かつたよ。ただし…」

……さすがに、その田が怖いとは言えねえよな。

「俺だつて、Mr・KKのなんでも屋で生計たてる以上、謝礼はもううからなー！」

「捗してくれたなら、僕もちゃんとお礼するよ

苦笑いしながらもケンジはしつかりと答えた。

「ねー。おーい、ねー。……つか、名前がねえつてのも面倒なもんだな」

つて、俺の言えた義理じやねえか。

「ねー」

……Mr・KKのなんでも屋を改名して、Mr・KKの猫探し屋

にするべきか？

この前もベルの飼い猫を捗し回ったし。

1ヶ月の収入は、ほぼそれだけだもんな。

……毎回も迷子になる猫も猫だが。

「ねこー」

見つかんねえ。

結局その日は見つからず、あとに聞いてみると……。

「あ、ねこー、ひつぱんに帰ってきたよ」

……やつこいつは、早く戻してくれ。

## \* 双子以上オンガク仲間

「『吉高つよし』と『肥塚つよし』俺たちは2人で1人だ！」

「それでござりますね」

ニシニシッと笑う笑顔。

のほほんとした笑顔。

2人のつよしの笑顔。

「僕たちは2人で1人でござります」

サンバイザーと王冠。

タンクトップと王子服。

緑髪と金髪。

共通なのは緑色をした目と名前だけ。

「不思議でござりますね。こうして2人で話しているなんて」

「そうだなー。俺たち、元は1人2役だもんな」

苦笑い。

つよしの苦笑い。

「こう考えると、MONDOってけつこう凄い神様だよな」

「そうで、『ざわ』います。僕たちを、1人を2人にしてしまうんで『ざわ』いますからね」

楽しそうな鏡合わせ。

双子以上にそっくりな2人。

＝じゃなくて　でもない、　の2人。

好きなものはいつしょ。

嫌いなものもいつしょ。

趣味も共通

- 音楽を奏でること。

## 虹は光 解き放つは未来

見える。

……見えない。

「まだだ。また僕の未来だけ、ミエナイ」

様々な色の光が輝く水晶玉が白濁した。

さつきまでの明確なビジョンが消えていく。

僕は必ず当たる自分の占いが嫌いだ。

東西南北過去未来、なんでもお見通し。

でも“ジブン”に関しては何も見えなくなる。

直前までは見えていたイメージが霞んで消える。

時間が経つにつれて、見える時間が長くなつてきてしまふんだけ  
ど……。

「占い師の方ですか？」

ふと声が聞こえた。

「はい。占いをいじ所望ですか？」

意識を現実に戻すと、目の前には赤いベールの女性が立っていた。

小豆色の目が微かにベールから覗いていた。

楽器を持っているところから、吟遊詩人をしているのだと推測される。

「いえ…… すみません。なぜだか、懐かしさを感じて」

見ると東洋系の顔つきをしている。

どこかで見たことある気がするが……。

それに、頭上のテールがざわついている。

「もしかして、ファティマかい？」

「やっぱり、アブラハムですね。久しぶり」

彼女の笑顔を見るのはいつぶりか。

「僕が一座を抜けて以来かい？」

「そうね。同じ街にきているなんて、偶然ね」

「水晶玉に導かれたんだ。この街に行くよ！」

一座に会いたいと願っていた。

占つても一座と会える自分が見えなかつたから、諦めていた。

でも、会つことができた。

……これは、偶然なんだね？

「一曲聞く？ 再会記念に」

無邪気に笑う彼女。

「そうだね。聞かせてもらおうか」

「何がいい？ GADARINAとか？」

「僕の曲、覚えててくれたんだ」

笑うファティマ。

つられて笑顔になる。

ファティマは座ると、スッと手を閉じた。

あぐらで安定する位置に楽器を置いて、ゆっくりと爪弾き始める。

儚げな旋律が辺りをかける。

一つの楽器だけで奏でられているとは思えない。

いつ聞いても、高い表現力だと感づ。

「この曲は、私にとって大切な曲だから……」

そう聞こえた気がした。

## 夕飯はきつとカレー

「「」はん~」

ジャックが拙い発音で、夕飯の準備を急かす。

「六、どこに旅立つたもんか……」

「「」はん~」

「わーつたつて」

慣れない手つきで、金髪の学生が準備を進める。

料理に付き物の「トントントン」とこづ軽い音ではなく、「ゴト  
ン、」「トン」と不器用さを際立たせるような音が響いている。

「イテツ」

.....いやな予感のする声があがつた。

「ゆひふ~はあー（指切つたー）」

「リュータ、だいじょぶ大丈夫か？」

リュータは人指し指をくわえながら、うなずいた。

「ら、かしこいわ大丈夫」

……もうやうやく飯にあつたのは前分あとになつそうだ。

## まいにち ものす（前書き）

冒頭の文は、公式のキャラ紹介文から引用しました。

## おこで おとこ もの

だれもじらない なんせよくのつみで

サウスはうたつていたよ

サウスはかぶかぶつたつたよ

「 」

だれもじらない なんせよくのつみ

まわりは ペンギンだらけ

あたまのうえにま なんせよくてんのはた

「 」

くらげみたいに ゆらゆら

くらげみたいに ふわふわ

「 」

ふえる あわあわ

みえる ぶくぶく

あえる プカプカ くらげどともこ  
元

「 」 」

めにいる

うた うたつてる

ことば ない

うた うたつてる

「 」 」 」 」

ひびく うた

ひびく こえ

うた うたつてる

サウスは うた うたつてる

だれもじらない なんきょくのうみで

## 独白・世界観

「泣きたいトキは笑つてうたうちや えばいいんだよ」

アタシの口癖。

だつて、そう思わない?

ヤなコト全部、お空の向こうに飛んでいたりやしない?と思わない?

「……莫迦莫迦しいラブソングだ」

此の世界には莫迦莫迦しいラブソングが溢れかえっている。

窒息してしまいそうだ。

汚れちまつた空気が俺のメガネを曇らせるんだ。

「夏の海と波の音と俺!」

サーフィンが好き。

誰がなんと言つても、サーフィンが好き。

雪はキライ。

サーフィンもできなきゃ、浜で昼寝もできやしない。

とにかく、サーフィンさいこーーー！

「俺達は2人で1人だぜ！」

「僕達は2人で1人でござりますー」

？？？

2人じゃない？

1人2役の間違い！？

そうとも言つかもしれないな。

でも、僕達は2人で1人でござります。

俺達の絆は強いんだぜ。

絶対に切れないのですぞいます。

## 学生達の日常（冬分）

「興味ないで候」

「えー」

さゆりがナカジをゲレンデに誘つている。

ナカジはバツサリと切り捨てるが。

「いつしょに行こうよー」

「冬は出歩きたくない」

一步も引かないさゆりとナカジ。

「それにスキー板持つてない、し……」

「なになにー？ なんの話しぃ？」

「お前……」

ナカジの言葉を遮るよう<sup>さへ</sup>、ニッキーが現れた。

「ナカジ君をスキーに誘つてるの」

「ふーん……」

ニッキーがナカジをチラ見すると、さゆりの顔を見て言った。

「こんな堅物くんよりも、オレとゲレンデ行かなーい？」

「うーん……。ナカジ君行かないんなら、ニッキーと行こうかなあ？」

その言葉に、ナカジが急に立ち上がった。

「俺が行く」

ナカジはメガネ越しにニッキーを睨み付けた。

「こんなヤツとさゆりをいつしょになんかできない」

「オレ…… そんな嫌われてんの？」

「……まあ、変態だしねー」

タローののんきな声がしめた。

こんな日常。

## ウヘ「口」ジャージがスーツ

「……ブツ」

「わ、笑うなーー！」

「だつて、スー……クック」

金髪を揺らして笑つてるのは、金髪ウヘ「口」英語教師」とロード。

笑われているのは新米熱血元ヤンジャージ教師」とハジメ。

なぜ笑われているかと言つと……。

「お前、スース着ると違和感ありすぎウヘツ」

そうなのだ。

いつもジャージにタオルとラフな格好のハジメが、珍しくスースを着ているのだ。

「にしても、ククツ、なんでスースなんか着てんだ?」

「今日は授業参観なの分かつてる? 中等部の」

言われてポカーンとしたDTOは、すぐさま「分かつてます」と言わんばかりの表情を浮かべた。

「も…… も、 もちろん分かってる口」

……分かつていなーのは一田瞭然、いや一聞瞭然だが。

「おはよー」

そこにはリュータが現れた。

遅刻確定ぎりぎりの時間帯だ。

「おはよー」

「おはよー。リュータ、遅刻するウベー」

その言葉に、リュータは「は？」と言いたげな表情をした。

「……今日は懇談会で、高等部生は休みなんだけど」

そのリュータの言葉に、今度はDTOが「え？」という表情を浮かべた。

「……まさか、高等部の教師であるDTOが知らなかつたなーんて  
…… あるわけないよね?」

「そ、そ、そんなことあつたらはずがないです、うー」

DTOはフイと皿を返した。

……ポップン学園はこんな教師がいる、平和な学園です。さつじ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3306z/>

---

If in pop'n music

2011年12月21日10時45分発行